計画研究　A02(課題番号：06208104)

環東シナ海地域間交流史－中国福建を中心として－

研究代表者：夫馬進・京都大学・文学部・教授

１．研究項目：A02　環東シナ海地域間交流史

２．研究課題名：環東シナ海地域間交流史－中国福建を中心として(課題番号：06208104)

３．研究期間：平成６～９年度（1994～1997）

４．交付研究費：平成６年度　6,400 千円
平成７年度　7,600 千円
平成８年度　6,800 千円
平成９年度　2,200 千円　　合計　23,000 千円

５．研究組織(氏名：所属機関・部局・職)
研究代表者：夫馬　　進（京都大学・文学部・教授）
研究分担者：井上　裕正（奈良女子大学・文学部・教授）
同　　岩井　茂樹（京都大学・人文科学研究所・助教授）
同　　藤本　幸夫（富山大学・人文学部・教授）
同　　松浦　　章　（関西大学・文学部・教授）
同　　村尾　　進　（天理大学・国際文化学部・講師）
同　　岡本　隆司（宮崎大学・教育学部・講師）(平成９年度)

６．研究目的

本研究は重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」の一環をなし、東シナ海をめぐる地域間交流の歴史について、それを中国福建省地域を中心に明らかにしたものである。

中国福建省は古くから琉球（沖縄）と密接な関係にあった。明清時代においては福建省省城の福州が中国－琉球間の交流の拠点であり、中国側から冊封使などの使節が琉球に送られる時にも、ここから船出した。このため明の陳侃『使琉球録』、清の李鼎元『使琉球記』など、福州－琉球－福州の行程・行事を記録した数多くの旅行記が残されており、豊かな琉球情報を提供してくれる。にもかかわらず、これら旅行記に関する網羅的で基礎的な研究は、これまでなされなかった。本研究の目的の第一は、まず、これら旅行記の所在調査と資料収集を徹底して行い、日本史研究者（琉球史研究者）であれ中

国史研究者であれ、誰もが容易に原資料に近づきうるようにすることであった。

本研究の目的の第二は、上に述べた琉球－福州－北京の間の朝貢・冊封関係を東アジア世界全体の中で位置付け、さらに琉球と諸外国との関係を探ることであった。また使琉球録という文献を、東アジア世界における中国と諸外国・諸民族との朝貢・冊封関係、並びにこれに係わる使節の記録との比較において、より客観的により立体的に把握することであった。

７．研究経過と研究成果の概要

(１)使琉球録の所在調査と収集、及び情報化

まず使琉球録の所在調査を行い、「主要図書館所蔵使琉球録関係漢籍目録」を作成した。これはすでに『沖縄の歴史情報ニューズレター』NO.4 Winter 1995 に掲載して公表したが、さらに当計画研究の研究成果報告書である『使琉球録解題及び研究』（科学研究費補助金研究報告書・1998 年）に再録した。これは京都大学人文科学研究所、京都大学文学部・附属図書館等、東京大学東洋文化研究所、内閣文庫、東洋文庫、国立国会図書館、静嘉堂文庫、尊経閣文庫のそれぞれにつき使琉球録諸版本と関連図書の所蔵状況を調査し、目録としたものである。これにより琉球史の研究者はより広範な図書情報を入手することができうるようになったし、当計画研究でも、これによりその後の使琉球録研究をすすめる基礎ができた。

次に総括班の企画する「琉球史料集成」の一環として、各図書館に所蔵する使琉球録のそれぞれにつき最も良い版本を選び、CD-ROM ないしはマイクロフィルムを作成した。その詳細は（第３部）に掲げてある。

(２)使琉球録全文テキストファイルの作成

各種使琉球録のうち４つのものについて、全文データテキストファイルを作成した。作成したテキストは陳侃『使琉球録』、蕭崇業『使琉球録』、夏子陽『使琉球録』、それに徐葆光『中山伝信録』の４つである。この情報化によって『歴代宝案』、『清代中琉関係档案選編・続編・三編』と並ぶ琉球史研究の基礎的データを入力することができた。これらを情報化した方法については、同じく（第３部）に詳しく述べてある。

(３)『歴代宝案』テキストファイル作成への助言とその利用

総括班によって作成されつつあった『歴代宝案』全文データテキストファイルを実際に利用し、『歴代宝案』を使用する研究者としての立場からいくつか提言し、アドバイスを行った。また研究分担者の間でコンピュータを利用することに慣れるため、全員がパソコンを携帯して集まりコンピュータを用いて検索に役だてながら、『歴代宝案』の輪読を行った。本報告の８．研究会等の開催記録に記した平成８年３月 10 日・11 日の研究会がそれである。

(４)使琉球録解題の作成

各研究分担者は、合計 12 種ある使琉球録のそれぞれについて研究し、その解題を分担執筆した。これまで 12 種の使琉球録の存在はもちろん知られていたが、それぞれについての総合的で詳細な解説はされており、中国側朝鮮側史料からの新知見を加え、これまでの使琉球録研究をさらに一歩進めたものである。分担執筆にあたっては、事前に研究会において報告し、知見を補いあった。また研究分担者のみならず琉球史研究の専門家にも教示を請うた。解題は〔テキスト〕〔作者略歴〕〔内容・目次〕〔旅程、出発から帰国まで〕〔琉球での主な行事、行動〕〔使者の構成〕〔時代背景〕などの項目によって記

述される。その成果として夫馬進編『使琉球録解題及び研究』（研究成果報告書、京都大学文学部東洋史研究室、1998）がある。

『使琉球録解題及び研究』の目次は下記の通りである。

解題篇

陳侃『使琉球録』解題	藤本幸夫
郭汝霖『重編使琉球録』解題	夫馬　進
蕭崇業『使琉球録』解題	岩井茂樹
夏子陽『使琉球録』解題	夫馬　進
胡靖『琉球記』（『杜天使冊封琉球真記奇観』）解題	松浦　章
張学礼『使琉球紀』『中山紀略』解題	夫馬　進
汪楫『使琉球雑録』『中山沿革志』解題	松浦　章
徐葆光『中山伝信録』解題	岩井茂樹
周煌・『琉球国志略』解題	村尾　進
李鼎元『使琉球記』解題	村尾　進
斉鯤・費錫章『続琉球国志畧』解題	井上裕正
趙新『続琉球国志略』解題	井上裕正

研究篇

使琉球録と使朝鮮録	夫馬　進
書籍を通じて見た朝鮮と琉球の交流	藤本幸夫
萬暦四十五年暹羅国遣明使―明代朝貢形態の様相―	松浦　章

付篇

主要図書館所蔵使琉球録関係漢籍目録

(５)福建・琉球を中心とした東シナ海地域間交流の研究

福建(中国)―琉球の関係を東アジア世界の中でより客観的より構造的に把握するため、研究分担者は以下のような研究を行った。

夫馬進は主に使琉球録を使朝鮮録と対比することによって、使琉球録の性格を明確にした。またこれによって明清中国と琉球との関係の特殊性を明らかにした。ここに紹介された使朝鮮録の目録と解題はこれまでの朝鮮史研究でもなかったものである。明清中国―朝鮮との関係も使朝鮮録を使琉球録と対比することによって同じくより客体化でき、同じく中国と朝鮮との関係の特殊性が明確化した。その研究の一つとして「使琉球録と使朝鮮録」（上記研究成果報告書・所収）がある。

井上裕正は明清中国と琉球等諸外国との関係の中で、特にアヘン戦争の前後でいかなる変化があったのかを明らかにした。なかでもカントンシステムの実態をより明らかにした。その研究成果としては『林則徐』等がある。

岩井茂樹は、明清中国における各地辺境社会の動きの一つとして、琉球と福建の関係を位置付けた。この視点によって福建等東シナ海沿岸地域と北方長城ライン・遼東地方が同じ視座に置かれ、今後の東アジア世界の把握にとって有力な視点が提供された。その研究成果としては「16・17 世紀の中国辺境社会」等がある。また主に『清代中琉関係档案選編・続編・三編』をもとに清朝と琉球との貿易品

目のリストを作成した。さらにコンピュータにおける漢字処理の問題の解決にあたり、さまざまな提言を行った。その成果の一端は（第４部）に記されている。

藤本幸夫は朝鮮書誌学の専門家である利点を生かし、これまで必ずしもよく知られていなかった書籍をめぐる朝鮮と琉球の交流に新たな光をあてた。また当計画研究のためにさまざまな朝鮮史料について情報提供を行った。研究成果の一つとして「書籍を通じて見た朝鮮・琉球の交流」（上記研究成果報告書・所収）等がある。さらに朝鮮版本にかかわる研究を行った。

松浦章は明清中国の琉球行使節が乗った封舟について研究し、「明清時代の使琉球封舟について」等の研究成果をあげた。さらに明代におけるシャムの朝貢使節について研究し、琉球の朝貢使節の性格をより東アジア世界の中で客体化しようとした。その研究成果として「萬暦四十五年暹羅國遣明使―明代朝貢形態の様相―」（上記研究成果報告書・所収）がある。

村尾進はカントンシステムの研究を行い、さらに琉球―中国の交流拠点であった福州と、シャム等東アジア諸国及びイギリスと中国との交流拠点であった広州（カントン）との比較に着目し、「非港市論」等の研究発表をおこなった。また使琉球録研究のため、各種使琉球録の撰者および随行者の伝記を故宮博物院（台北）において調査し、史料を収集した。

以上研究分担者がそれぞれ研究成果をあげることができたのは、４年間にわたって毎年数回継続して開いてきた共同研究会において、それぞれ異なる専門の立場から活発な討論が行われたからにほかならない。研究報告の題目については「研究会等の開催記録」に記してある。研究分担者以外にも数多くの参加者があり、さまざまな意見を提供していただいた。筑波大学の片岡一忠教授および神戸女学院大学の真栄平房昭教授には特に感謝する。またこの共同研究会では、研究分担者の他に何人かの専門家に報告していただいた。ことに、これまで使琉球録について長年研究されてきた原田禹雄先生と、カリフォルニア大学のジョシュア・フォーゲル教授にご報告いただけたのは、望外の喜びであった。

このように研究目的の第２として掲げた問題についても、大きな成果をおさめることができた。各研究分担者がそれぞれにあげた研究成果は、琉球史研究という範囲の中にあっては必ずしもあげることはできなかったものである。したがって、個々の研究者の研究は全体として、今後の琉球史研究にとって新たな視点を提供するものと考える。

（６）『明清奏議目録』の作成

環東シナ海地域間交流史の研究のためには明清時代の奏議を利用する必要がある。このため研究代表者は『明清奏議目録』の作成を企画した。これは中国社会科学院歴史研究所（北京）、北京図書館、ハーバード燕京図書館（ケンブリッジ）、コロンビア大学図書館（ニューヨーク）、アメリカ議会図書館（ワシントン）においてかつて調査した明清奏議のカードをベースとし、さらにすでに出版されている世界主要図書館漢籍目録のうち明清奏議にかかわるものをコンピュータに入力してできたものである。撰者をもとに「あいうえお順」に配列され、書名索引からでも検索できる。この目録は環東シナ海地域のみにとどまらず、広く明清中国及び当該時代の国際関係史の研究にとっても利用度が高い。できるだけ早く出版することを目指している。

８．研究会等の開催記録

平成６年度

◆日　時：平成６年８月１日(月)13時～16時
　場　所：京都大学文学部夫馬研究室
【協議】研究計画について、その他
◆日　時：平成６年９月17日(土)14時～17時
　場　所：(財) 生産開発科学研究所会議室（京都市）
【研究報告】夫馬　進：「使琉球録について」
◆日　時：平成６年10月22日(土)14時～17時
　場　所：京大会館216号室
【研究報告】岩井　茂樹：「貿易品目リストとその周辺」
◆日　時：平成７年３月11日(土)11時～17時
　場　所：京大会館 219号室
【研究報告】松浦　章：「明清時代使琉球封舟について」
　　村尾　進：『“カントン・システム”のなかの都市広州」
　なお、平成６年12月４日総括班主催の研究会で、研究分担者の一人は次のような報告を行い、研究会での報告に代えた。
　　井上　裕正：「アヘン戦争と琉球」
平成７年度
◆日　時：平成７年８月28日(月)13時～17時
　場　所：京大会館 217号室
【研究報告】藤本　幸夫「明陳侃撰『使琉球録』諸版について」
◆日　時：平成７年10月１日(日)13時～17時
　場　所：京大会館 217号室
【研究報告】岡本　隆司：「市舶司から海関へ」
【『歴代宝案』輪読】夫馬　進：校訂本第１冊 p.509下～p.513上（洪熙元年間７月17日咨文２通）
　　井上裕正：校訂本第４冊 p.584～p.586上（乾隆14年12月24日咨文）
◆日　時：平成７年11月25日(土)10時～12時半
　場　所：琉球大学教育学部３階 323演習室
【研究会】西里　喜行：『歴代宝案』輪読
　　台湾大学本第14冊、p.7985上段からp.7990下段（1854年「ロバート・バウン号事件」にかんする報告）
◆日　時：平成８年３月10日(日)13時～17時
　場　所：京大会館 215号室
【『歴代宝案』輪読】岩井茂樹：校訂本 第１冊、1-03-01（p.99下～p.104上）
　　1-03-02（p.104下）
　　村尾　進：校訂本 第１冊、1-14-03（p.454下～p.455下）
　　1-14-10（p.464上～p.465上）
　　1-14-12（p466下～p467下）
　　松浦　章：台湾大学本、 p.3709下～p.3710下

p.3714 上～p.3715 上
p.3733 下～p.3734 下

◆日　時：平成８年３月 11 日(月)13 時～17 時
　場　所：京大会館 217 号室
【『歴代宝案』輪読】夫馬　進：校訂本 第１冊、1-06-11（p.193 上下）
1-06-12（p.194 上～p.195 下）
1-22-06（p.741 上～p.742 上）
井上裕正：校訂本 第７冊、2-89-05（p.552 上～p.555 上）

平成８年度

◆日　時：平成８年６月 16 日(日)13 時～17 時
　場　所：京大会館 107 号室
【研究報告】村尾　進：「港市としての福州と広州」

◆日　時：平成８年７月 21 日(日)13 時～17 時
　場　所：京大会館 217 号室
【研究報告】ジョシュア・フォーゲル(カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授)
：「翁広平とその『吾妻鏡補』―清代における中国人の日本知識―」

◆日　時：平成８年 10 月 20 日(日)13 時～17 時
　場　所：京大会館 220 号室
【歴代宝案輪読】藤本幸夫：校訂本 第２冊、1-39-02（p.506 上下）
1-39-03（p.597 上）
1-40-10（p.544 下～p.545 上）
1-40-11（p.545 下～p.546 下）
1-41-17（p.581 上～p.582 上）
【使琉球録解題研究報告】松浦　章：「崇禎６年使琉球使―杜三策・胡靖―」

◆日　時：平成８年 12 月 22 日(日)14 時～17 時
　場　所：京大会館 220 号室
【使琉球録解題研究報告】夫馬　進：郭汝霖『重編使琉球録』
村尾　進：周煌『琉球国志略』

平成９年度

◆日　時：平成９年６月 15 日(日)13 時～17 時
　場　所：京大会館 103 号室
【研究報告】原田　禹雄：「琉球の冊封について」

◆日　時：平成９年９月 28 日(日)13 時～17 時
　場　所：京大会館 220 号室
【使琉球録解題】13 時～15 時

蕭崇業『使琉球録』	岩井茂樹
夏子陽『使琉球録』	夫馬　進
張学礼『使琉球紀』『中山紀略』	夫馬　進

汪楫『使琉球雑録』『中山沿革志』　　松浦　章
徐葆光『中山伝信録』　　岩井茂樹
李鼎元『使琉球記』　　村尾　進
斉鯤『続琉球国志畧』　　井上裕正
趙新『続琉球国志略』　　井上裕正

【研究報告】15時半～17時

夫馬　進：「使琉球録というもの－使朝鮮録との対比を中心にして－」
村尾　進：「非港市論」

10. 発表研究論文等研究業績一覧

夫馬　進

「訟師秘本『蕭曹遺筆』の出現」(1994年『史林』77-2、p.157～189)
「明帝国の斜陽」(1994年、谷口規矩雄編『アジアの歴史と文化・４』同朋舎出版、p.35～51)
「訟師秘本の世界」(1996 年 小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所 p.189～238)
『中国善会善堂史研究』(1997年、同朋舎出版、876p)

井上　裕正

「『嘉慶元（1796）年アヘン外禁』説辨誤」(1994年、中塚明編『古都論－日本史上の奈良』柏書房、p.134～150)
『林則徐』(1994年《中国歴史人物選》第12巻、白帝社、274p)
「２つのアヘン戦争」(1995年 堀川哲男編『アジアの歴史と文化・５』同朋舎出版、14～26)
「アヘン弛禁論の形成について」(1996年『東洋史研究』55-3 p98-134)
『中華帝国の危機』（共著）1997年『世界の歴史』19（中央公論社）406p
「斉鯤・費錫章撰『続琉球国志略』解題」、「趙新撰『続琉球国志略』解題」(1998 年、夫馬進編『使琉球録解題及び研究』p.109-116)

岩井　茂樹

「徭役と財政のあいだ－中国税・役制度の歴史的理解にむけて（一）（二）（三）（四)」1994年『経済経営論叢（京都産業大学)』28-4 p1～58、29-1･2･3 p1～50･p1～68･p1～88
「洋務運動論」「変法論と戊戌新政」1995 年 堀川哲男編『アジアの歴史と文化・５』(同朋舎出版) p38～63
「十六・十七世紀の中国辺境社会」1996年 小野和子編『明末清初の社会と文化』(京都大学人文科学研究所）p625～659
『データで見る中国近代史』（共著）1996年（有斐閣）p197

藤本　幸夫

「朝鮮本の訂正に就いて－『重修政和経史證類備用本草』を中心にして」1994年『朝鮮文化研究』1 p93～136

「清朝朝鮮通事小攷」1994 年 京都大学人文科学研究所研究報告『中国語史の資料と方法』p255～290
「朝鮮版『白氏文集』攷」1995 年 『白居易研究講座　第六巻「白氏文集の本文」』（勉誠社）p180～201
「高麗大蔵経と契丹大蔵経について」1996 年 気賀沢保規編『中国佛教石経の研究』p241～281
「刻工名による朝鮮刊本の刊年・刊地決定法試論」1996 年『青丘学術論集』８　p35～70
「朝鮮書誌学の諸問題」1997 年 『朝鮮学報』第百六十三輯 p1～19

松浦　章
「浙江商人汪鵬と日本刻『論語集解義疏』」1995 年『関西大学文学論集文学部創設七十周年記念特輯』p387～407
『中国の海賊』1995 年（東方書店）p1～196
「明清時代の使琉球封舟について」1995 年『関西大学文学論集』45-2 p45～84
「清初の ▪ 関について」1996 年 小野和子編『明末清初の社会と文化』（京都大学人文科学研究所）p315～341
「晩清期上海・南市の沙船航運業」1996 年『関西大学文学論集』46-1 p1～18
「越前宝力丸の上海・川沙漂着について」1996 年『若越郷土研究』41-5 p79～84
「清代前期の浙江海関と海上貿易」1997 年『史泉』85 p19～32
「海盗蔡牽一族の墳墓」1997 年『関西大学博物館紀要』3 p163～p168

村尾　進
「珠江・広州・澳門―英文および絵画史料から見た「カントン・システム」―」1996 年 小野和子編『明末清初の社会と文化』p661～701
「アヘン戦争前後の広州から」1997 年『イギリス帝国史研究会ディスカッションペーパー』1 p1～15

岡本　隆司
「清末粤海の展開―広州のおける洋関設立の意味―」1994 年『史林』77-6 p1-31
「カントン洋行考―洋行に関する新旧資料を通じて―」1995 年『東洋史研究』54-2 p165-201
「一九二〇年中国の内債問題」1995 年 狭間直樹編『一九二〇年代の中国』（汲古書院）p187-222
「北洋軍閥時期における総税務司の役割―関税収入と内外債を中心に―」1995 年『史学雑誌』104-6 p1-39
「開港と朝貢のあいだ―五港開港時代の福州を中心に―」1996 年『宮崎大学教育学部紀要（社会科学）』81 p1-24
「『關税紀實』にみる国民政府の財政経済」1998 年 3 月刊行予定『宮崎大学教育学部紀要（社会科学）』84